

蜂須賀家のお姫様 その美しくも波瀾万丈の人生

徳島藩の歴代藩主蜂須賀家のお姫様は、あまり大河ドラマなどにも登場せず人々の話題になることも少ない。しかし、魅力的な姫も多く歴史の大きな流れの中で翻弄されながらも、波乱万丈の人生を力強くそして美しく生きた。蜂須賀家のお姫様は多いが、その中で代表的なお姫様について紹介したい。

まずは、大河ドラマなどで少しは知られている蜂須賀正勝の娘「糸姫」。

徳島城を築城した藩祖 蜂須賀家政の妹だ。



NHKの軍師官兵衛では、高畑充希さんが可愛いじゃじゃ馬「糸姫」を演じた。

天正12年(1584年)1月、17歳になる黒田官兵衛の長男長政が妻を娶った。

相手は秀吉の養女で、蜂須賀正勝の娘、もともと二人の結婚は、天下人とならんとする豊臣秀吉の元での政略結婚。子になかった秀吉は、この正勝の娘を養女格として、天正12年(1584年)1月、有名な黒田官兵衛の子で17歳になる福岡藩初代藩主黒田長政に嫁がせる。

糸姫。この時11歳だった。ふたりの間には一人の姫(菊)が生まれる。糸姫にとっては幸せな時期だったのだろう。糸姫は長政とは仲むつまじい夫婦生活を送るが、悲しいことに世継ぎの男子が生まれなかった。

慶長3年(1598年) 秀吉が逝去すると情勢は一変。文治派の石田三成らと対立を深めていた長政は、同じく三成への憎悪を募らせていた秀吉子飼いの武将、福島正則、加藤清正らとともに徳川家康に接近。家康の養女である「栄姫」(保科正直の娘)を正室に貰い受けると、それまでの正室であった糸姫を離縁してしまう。



軍師官兵衛では吉本実憂さんが、波瀾万丈の歴史に翻弄(ほんろう)される栄姫を演じている。

離縁された糸姫は一人娘を残して泣く泣く実家の蜂須賀家へ戻ることになる。残された菊姫は、その後、黒田家の家臣、井上九郎右衛門の息子のもとへ嫁いでいる。

「糸姫」との離縁が、江戸時代中期までの黒田家と蜂須賀家の127年に渡る「不通大名」のきっかけとなった。

糸姫はその後、実家の阿波国で暮らし、孫である忠英にも大事にされて静かな老後を送る。正保2年（1645年）に死去。戒名は寶珠院殿桃溪僊公尼大姉。母親の白雲院と共に、眉山山麓の桃溪山臨江寺に静かに眠っている。

同じく正勝の娘、糸の姉の「奈良姫」。

奈良姫（～慶長11年（1606年））は糸と同じく正勝の側室白雲院から生まれる（正室まつが母とも？）。尾張三洲村領主・中山源八郎直親に嫁いでいたが、直親が元龜元年（1570年）の金ヶ崎の戦いで討死したため離縁となった。その後、賀島長昌（後の阿波徳島藩家老）の正室となる。長昌との間には、元龜3年（1572年）に賀島政慶（牛岐城代10000石）をはじめ、3人の娘（山田宗登室、益田長行室、益田正高室）を儲けた。

賀島長昌は、信長に仕えていたが天正10年（1582年）、本能寺の変で主君信長が死去すると、天正13年（1585年）に妻・奈良姫の兄である蜂須賀家政を頼って阿波に来た。家政より一万石を与えられ徳島城を預けられた。慶長11年（1606年）、死去。墓所は奈良姫ともに徳島県阿南市にある本覚寺に葬られる。奈良姫の生誕日は解らないが、家政（永禄元年（1558年）生）と同時期に生まれたと思われる。

金ヶ崎の戦い（「金ヶ崎の退き口」という）で、秀吉軍の最後尾を担当したのが正勝であった。その時、夫中山源八郎を失い信長の家来であった賀島長昌に嫁ぎ、信長死後、阿波に来て阿南富岡の牛岐城で暮らし牛岐城に骨を埋めた奈良姫の生涯は、あまり目立たないが波乱万丈であったと思われる。

次は、蜂須賀家政の娘「万姫」。

天城池田家初代「池田由之」に嫁ぎ「池田由成」を生む。

その「池田由成」の娘「池田熊子」は、赤穂藩浅野氏永代家老家である大石家の嫡男大石良昭に嫁ぎ、忠臣蔵で有名な「大石内蔵助」（大石良雄）を生む。つまり、大石内蔵助は蜂須賀家政の玄孫にあたる。

その為か、吉良邸への討ち入りに際して、阿波・蜂須賀飛騨守（富田藩主蜂須賀隆重）の申し出により吉良上野介は呉服橋から本所へ移転したと言われている。（呉服橋は警備が厳しく本所のほうが討ち入りには適している。）

堀部安兵衛の「堀部武庸（ほりべ たけつね）筆記」や『江赤見聞記』巻四によれば、吉良邸の隣の蜂須賀飛騨守は、赤穂浪士の討ち入りを警戒していて出費がかさむという理由で老中に吉良の屋敷替えを願い出ている。

討ち入りをしやすくするために蜂須賀飛騨守が老中に願い出て、幕府が吉良を郊外に移したのではないか、そんな噂が江戸に流れたらしい。元禄15年8月19日には吉良は呉服橋の屋敷を召し上げられて、江戸郊外の本所松坂町に移り住む事になった。その後すぐ元禄15年12月14日に討ち入りは行われた。

また、浅野内匠頭が饗応役となった元禄14年の翌年、討ち入りのあった元禄15年には饗応役として相馬叙胤（陸奥中村藩主6万石）と共に蜂須賀隆重（阿波富田藩主5万石）が選ばれている。蜂須賀隆重は饗応役を経験することにより、余計に血の繋がった大石良雄に情が移り討ち入りに協力したのかもしれない。



池田熊子の叔父である蜂須賀 玄寅の実子 三尾 正長は、赤穂藩が改易され浪人していた甥である大石良雄に資金援助をしており、内蔵助は討ち入り前に三尾 政長にいとまの手紙を出している。

万は慶長17年（1612年）、岡山藩で没する。享年20。法号は即心院殿梅岩宗清大姉。興源寺に供養塔が建つ。

そして家政の娘「万姫」の妹「**阿喜姫**」。

徳川家康の命により、近江彦根藩二代目藩主・井伊直孝(井伊の赤虎井伊直政の次男)のもとへ嫁ぐ。直孝はその後大阪夏の陣で活躍し、手柄を立てて井伊の赤牛と呼ばれるようになる。その後代々大老職を務めるようになった。蜂須賀忠英が益田豊後事件で裁かれる時、大老として後ろ盾となったとも言われる。

また、家康の遠忌法会で将軍名代として日光東照宮に名代として参詣する御用は、直孝が務めて以降先例として彦根藩井伊家固有の御用となった。



日光社参の徳川家光と井伊直孝

この婚姻を皮切りに、それ以降も井伊家と蜂須賀家との間では幾度か婚姻が行われた。

「ひこにゃん」は直孝の飼い猫をモデルにしたと言われている。

更にその妹「**辰姫**」

松平康長の次男で徳川家康の甥にあたる松平忠光の正室となる。忠光との間には、後に上野七日市藩主・前田利意の正室となる二の丸殿を生む。

父の康長は松本藩領安曇郡大町組、池田組、松川組の計 1 万 5000 石を忠光に分知させ、支藩として立藩させる計画で、元和 5 年、千国街道池田宿に若松城の築城が起工されたが、家督を相続することなく寛永 6 年（1629 年）に早世したため沙汰止みとなった。享年 32。

「辰姫」も同年に没する。父である家政は辰の供養のため、徳島県徳島市丈六町にある丈六寺の本堂を再建し、同寺に辰の墓を建てた。法名は実相院殿不見貞心大姉。

ここで、蜂須賀家に嫁いできたお姫様についても少し紹介したい。

まずは、正勝の正妻である大匠院「**まつ**」

「**まつ**」の出自は不詳であり謎に包まれている。蜂須賀家記など多くの古文書では、父は尾張の豪族益田持正とされている。尾張群書系図部集でも益田の女と記されている。

しかし、武功夜話では秀吉の家来の三輪吉高の女であり宮後八幡社々家三輪若狭の妹とされている。

蜂須賀家記考異によると、「**まつ**」は伊勢の国司北畠具教の側室となるが、子（東岳禅師）を妊った為、正妻北の方（六角定頼の娘）の恪気を避けて北畠具教の元を去り鈴鹿中河原関氏に依る。弟の益田内膳等の取り計らいで天文 12 年

(1553年)、蜂須賀正勝の正室となり、明けて天文13年(1554年)東岳禪師、そして永禄元年(1558年)家政を宮後城で産む。その後、正勝は秀吉と共に戦に明け暮れて各地を転戦し、ゆったりとした結婚生活とは無縁だったと思われる。龍野城の城主となっても毛利責めなどで忙しく、殆どまつとは一緒の時間を持つことはなかつたろう。

戦国武士の妻として「まつ」がどの様な暮らしをし、如何に正勝を支え家政を育てたのだろうか。

天正13年家政が阿波藩藩主となった後、摂津に養生料5000石を得て、正勝が大坂屋敷で余生を過ごした時には、やっと平和な夫婦生活を送ることが出来たのかもしれない。しかし、その平和な生活も長続きはせず正勝は天正14年労咳で没する。その後、徳島城に入り、子の家政とその妻「ひめ」そして孫の至鎮と一緒に幸せな余生を過ごしたと思われる。

関ヶ原の戦いでの、孫の至鎮の活躍をどの様に感じただろうか。

そして慶長16年(1611年)、死去。法名は大匠院殿光室玄圭大姉。始めは、子の東岳禪師が住職を務める福聚寺に葬られたが、夫・正勝の墓とともに興源寺に移された。

元和9年(1623年)勝浦郡宮井村(現在の徳島市多家良町)に大匠院の十三回忌に伴い息子・家政が大匠寺を創建した。現在でも荘厳な禅寺の大匠寺に念持仏である聖観音菩薩像と共に位牌が祀られている。



そして、家政の正室「ひめ」

「ひめ」は永禄6年(1563年)尾張の豪族小折城主生駒家長の女として生まれる。

織田信長の側室吉乃は家長の妹であり、ひめの叔母となる。

生駒氏は藤原良房の子孫で、灰や油の商いと馬借で富を築き、小折城と呼ばれる家屋敷を構えた武家商人であり、秀吉や織田信長などが屋敷に出入りしていた。正勝は川並衆として生駒家の物資の運輸の警護などをしていたとも言われている。その生駒家でその名の通り「姫」として大事に育てられた「ひめ」がどの様にして家政に嫁いだのか。

織田信長が明智光秀に本能寺で殺された後、羽柴秀吉軍が中国大返しを行い天王山で光秀軍と戦った山崎の戦いにも家政は秀吉に同行し戦った。その天正10年(1582年)に「ひめ」は20歳で26歳の蜂須賀家政の正室に迎えられる。そしてその翌年、天正11年には家政は賤ヶ岳の戦いに参戦するなど、非常に慌ただしい中の婚姻は何を意味するのだろうか。当時としては結婚年齢が遅いが、もしかするとその以前から婚約するなどしていたのかもしれない。

山崎の戦いや賤ヶ岳の戦いの武功で、天正12年(1584年)に播磨佐用郡内に3,000石を与えられ、その後、紀州征伐・四国征伐にも従軍、特に四国征伐では家政が活躍し戦功により阿波国17万5千石を与えられた。天正13年家政と共に阿波国に入った「ひめ」は天正14年(1586年)阿波一宮城で家政との間に長男・蜂須賀至鎮を出産する。しかし、その後家政は側室との間に三人の姫(万、阿喜、辰)をもうける。

慶長11年(1606年)、病により没する。享年43歳。法名は慈光院殿松嶺玄寿大姉。

慈光院の没後、弟の生駒善長は家政の家来になり、中老阿波生駒氏として明治維新まで蜂須賀家に仕えることとなる。

墓所は福島にある慈光寺。この慈光寺は息子である至鎮が八万町中津浦に創建したが、母の死を期に寺を現在地に移設し慈光寺と名を改めた。

そしてその次は、「敬台院」として有名な「氏姫」。

徳川家康の長男「松平信康」と、織田信長の娘「徳姫」との間に生まれた娘「登久姫」と、信州松本藩の初代藩主「小笠原秀政」の間に生まれる。幼名を「万姫」「お虎」と称し、やがて徳川家康の養女となって、伏見城に移る。木幡山伏

見城は秀吉により 1597 年（慶長 2 年）に完成した。しかし、秀吉はその 1 年後の 1598 年（慶長 3 年）に城内で没する。

秀吉の死後、その遺言によって豊臣秀頼は伏見城から大坂城に移り、代わって五大老筆頭の徳川家康がこの城に入り政務をとった。

「氏姫」が家康の養女となり、伏見城に入ったとされるのはこの頃だろうか。

木幡山伏見城は、1600 年 8 月に行われた関ヶ原の戦いの前哨戦である伏見城の戦いで落城した。

「氏姫」は伏見城落城寸前、9 歳のときに徳島藩初代藩主蜂須賀至鎮に嫁いで、徳島藩第二代藩主蜂須賀忠英そして三保姫（岡山藩第二代藩主池田忠雄の正室）と萬の方を生む。

蜂須賀家は豊臣恩顧の織豊大名であり、その嫡男（跡継ぎ）と徳川家の婚姻というのは、豊臣家への反目と受け取られかねない。

そしてこれは当然、豊臣家の許可のない婚姻であった。（大名同士の婚姻には豊臣家の『許可』が必要だった）

家康は大名同士の婚姻を勝手に行ってはならないとする秀吉の遺言を破り、福島、黒田、伊達らにも縁組を斡旋した。

関ヶ原の戦いの直前、蜂須賀家政（号・蓬庵）は阿波国を豊臣家に返上し、高野山にて出家する。

家康の上杉景勝征伐に、至鎮は妻の氏姫が徳川家康の尊孫であり養女でもある事を理由に、益田宮内等わずか十数騎の兵を率い、氏姫と縁組間もない 14 歳で出陣した。

石田三成が挙兵すると、小山評定において、東軍に参加を表明し、関が原戦において武功を挙げた。（少ない戦力で大した戦果はあげなかったと思われるが、東軍に参加したことが評価された）

その為、阿波国は再度、蜂須賀家が治めることとなった。その後、至鎮は大坂の役において、2 代将軍徳川秀忠より 7 つもの感状を受ける働きをした。これにより淡路一国 8 万 1 千石を与えられ、25 万 7 千石を領する大封を得た。

氏姫は、蜂須賀に嫁いでからは若い藩主の至鎮を守り 20 年の間苦楽を共にした。しかし、大坂の役の後至鎮は急病を患った。その病について幕府の陰謀で氏姫が至鎮に毒を盛り、至鎮は悔しさに地団駄を踏んで表御殿庭園の大きな青石を踏み割ったとの言い伝えがあるが、それは間違いであり、実際には夫婦睦まじく有馬温泉などに一緒に出かけたとの話も残っている。至鎮が京都で治療を受けていた頃、家政と共に氏姫は病氣祈願に訪れた要法寺の日恩上人に教化され、それが大石寺門流との縁となったとも言われている。

夫を亡くした敬台院は、元和 8 年頃白金の江戸中屋敷に入り人質生活を送ることになった。それから毎年銀 50 枚と綿百把を与えられることとなった。

元和 9 年、家光が三代将軍と成り 13 歳の忠英は元服した。

この頃から敬台院は日精に深く帰依した。大石寺御影堂の建立寄進、江戸鳥越・法詔寺建立、大石寺朱印状下附の実現、総本山二天門の建立、日精の公儀年賀における乗輿の免許、大石寺基金七百両の寄進、「細草檀林」設立に当たっての支援などに貢献したと言われ、熱心な法華宗の信徒であり、日蓮正宗との関わりは深い。

蜂須賀家に嫁いだ時、化粧料として 3000 石をあたえられていたのが藍住町の矢上であり、もともと禅宗のお寺だった矢上の正法寺は、敬台院により法華宗に改められた。その時村人全員が法華経に改宗したと言われている。その為、正法寺にある地神塔には、農業守護神の代わりに「百穀苗稼 甘蔗葡萄」等の『法華経』の経文が刻まれている。

そして正保 2 年（1645 年）に江戸の法詔寺を阿波に移して敬台寺を創立した。寛文 6 年（1666 年）に死去し、敬台寺に葬られる。法名は敬台院妙法日詔大姉。

そして「**三保姫**」は、蜂須賀至鎮と正室・氏姫の長女として生まれる。

その後、岡山藩主・池田忠雄に嫁ぐ。

池田忠雄は、播磨姫路藩主・池田輝政の三男。母は徳川家康の次女・督姫。慶長 7 年（1602 年）10 月 28 日、姫路城で生まれる。淡路国洲本藩主、のち備前国岡山藩第 2 代藩主。鳥取藩池田家宗家 2 代。

徳川家康の孫に当たることから慶長 15 年（1610 年）、9 歳で淡路洲本城に 6 万石の所領を与えられたが、岡山藩主である同母兄・忠継が 17 歳で早世したため、その跡を継いだ。

洲本藩は廃藩とされ、淡路一国は徳島藩の蜂須賀至鎮にあたえられた。

「三保姫」は、寛永 7 年（1630 年）、忠雄との間に長男・勝五郎（後の鳥取藩初代藩主）を出産。寛永 9 年（1632 年）、

次男・勝三郎を出産した。長男・勝五郎は3歳で鳥取藩初代藩主となり、元服して池田光仲と名乗り、紀州藩主・徳川頼宣の長女・茶々姫（因幡姫）と結婚しその血筋は今上天皇へと続く。以後、鳥取池田家と紀州徳川家との姻戚関係が継続した。法号は芳春院殿妙圃日香大姉。墓所は岡山県岡山市にある清泰院。

更に、「三保姫」の妹「**萬の方**」。

旗本奴として有名な「水野成貞（直参旗本 3,000 石）」の伊達姿に一目惚れして13歳で嫁ぎ、幡随院 長兵衛を殺害したことで有名な「水野成之」（水野十郎左衛門）の母となる。政略結婚の多い中、珍しい恋愛？結婚であった。

元和6年（1620年）蜂須賀至鎮が若くして没した後、藩主となった忠英が幼くて妻や子が居なかったため、代わりの人質となった敬台院に連れられて萬姫が江戸中屋敷に入ったのは6歳頃の事だったと思われる。幼い頃父を亡くした萬姫は成貞の姿に勇ましかった父の面影を見たのかもしれない。

水野成貞の父は三河刈谷藩主、大和郡山藩主の後、福島正則改易の後初代福山藩主となる「水野勝成」だ。

この男も凄い。徳川秀忠と勝成は乳兄弟であり、初陣の直ぐ後16歳の時の戦いで首級をあげ、信長から感状を与えられる等数々の武功があるが、父の部下や茶坊主などを切り捨てるなどの蛮行があり父に勘当され出奔。

京都では従者も連れず闊歩し南禅寺の山門に寝泊まりし、町に出ては多くの無頼の徒と交わり、清水では大いなる喧嘩を始め、多くの人を殺害する事件を起こした。元祖あぶれものと言える。しかし勇猛であることを評価され黒田勘兵衛や小西行長等の武将に次々と仕え数々の武功を上げている。

「成貞」は勝成の三男として生まれる。徳川家光の小姓となり、3000石を領した。しかし、直参3000石の旗本でありながら傾奇者・初期の旗本奴として行動していた。奇抜な髪型をして髑髏の模様の服を着用し、刀の柄を棕櫚で巻いたもので揃えた仲間達と街を闊歩した。萬の方はその姿に惚れ込んでしまったと言われている。萬は嫁いでから成之（十郎左衛門）、忠丘、娘（賀嶋政玄室）、娘（稲田植春室）、娘（山崎幸玄室）を産む。

成之は父成貞が没した慶安3年（1650年）後を継ぎ3000石で小普請組に列した。旗本きっての家柄でありしかるべき役に就けるが、お役入りを辞退して自ら小普請入りを願った。成之もまた、江戸市中で旗本奴である大小神祇組を組織、家臣4人を四天王に見立て、綱・金時・定光・季武と名乗らせ、江戸市中を異装で闊歩し、悪行・粗暴の限りを尽くした。旗本のなかでも特に暴れ者を仲間にし、中には大名・加賀爪直澄や大身旗本の坂部三十郎広利などの大物も混じっていた。旗本という江戸幕府施政者側の子息といった大身であったため、誰も彼らには手出しできず、行状はエスカレートしていった。そのため、同じく男伊達を競いあっていた町奴とは激しく対立し、町奴の大物・幡随院長兵衛を騙して殺害した。成之はこの件に関して、切り捨てご免とお咎めなしであった。

しかし、その後突然隠居すると言い出し、病氣と称して出仕せず、遊び歩くなど行跡怠慢で寛文4年（1664年）に母・萬の方（正徳院）の実家・蜂須賀家の蜂須賀光隆にお預けとなった。翌27日に評定所へ召喚されたところ、月代を剃らず着流しの伊達姿で出頭し、あまりにも不敬不遜であるとして即日切腹となった。享年35。

2歳の嫡子・百助も誅されて家名断絶となった。夫として親として成之は何を考えて生きてののだろうか。

十郎左衛門切腹後、お家は改易、萬姫は次男忠丘と共に阿波に帰り、蜂須賀光隆に預けられた。

忠英の死後、阿波に帰って出来島屋敷に住んで居た老齢の敬台院も驚き嘆き悲しんだことと思われる。

正徳院は天和3年69歳で没して丈六寺に静かに眠っている。忠丘は元禄元年（1688年）に赦された。

あぶれ者の妻そして母として、夫だけでは無く子や孫までも失った萬姫の悲しい人生を思うと切なくなる。



氏姫の母である「登久姫」の妹「熊姫」その娘の「亀姫」そして孫娘の「繁姫」

「登久姫」の妹「熊姫」は播磨姫路藩初代藩主「本田忠政」に嫁ぎ、「亀姫」を生む。

「亀姫」は「登久姫」の子「小笠原忠脩(氏姫の兄)」の正室になる。「小笠原忠脩」は、慶長 20 年 (1615 年) の大坂夏の陣 天王寺・岡山の戦いで父と共に豊臣軍と戦うも敗死した。享年 22。長男の長次が幼年であったため、小笠原氏の家督は弟の忠真が継ぐこととなり、亀姫は家康の命で忠真に再嫁した。忠真は、島原の乱の際には長崎守備の任を果たし、剣豪・宮本武蔵が最も長く仕えたといわれる。亀姫の娘の「繁姫」は、従兄にあたる蜂須賀忠英の正室に入り、寛永 7 年 (1630 年) に蜂須賀光隆 (3 代徳島藩主)、寛永 11 年 (1634 年) に蜂須賀隆重 (初代富田藩主) を出産する。

姉の登久姫から氏姫へと続く蜂須賀家にまた信長の娘「徳姫」の血が帰ったとも言える。

最後に、10 代藩主 蜂須賀重喜の娘 儀子(載)と幸子(寿代) そして鷹司 并子

蜂須賀重喜は 32 歳の時阿波騒動で隠居を命じられ。明和 7 年 (1770 年) 江戸小名木屋敷に移り住んだ。その時に二人の姫 (載姫と寿代姫) は梁田時の次女、三女として生まれた。共に 1771 年生まれとの事なので双子の姉妹だったのかもしれない。

重喜は安永 2 年 (1773 年)、療養のため国元へ帰り大谷別邸に住む。その時に二人の姫も大谷屋敷に移り住む。重喜は大谷屋敷で、著名な金蒔絵師の飯塚桃葉や彫物師の堀江興成を召し抱え、陶芸や茶道に嵩ずるなど派手で豪華な生活を始めた。その時に絵師として召し抱えた河野栄寿と矢野栄教は藩主の重喜の絵の稽古相手をつとめ、重喜の娘、載姫と寿代姫にも大谷屋敷で狩野派の絵を教えた。二人の姫は優しくて気品のある絵を残している。

その後、儀子は天明 5 年(1785)関白の鷹司政熙に嫁ぎ鷹司 政通と鷹司 并子を生む。幸子は権大納言の醍醐輝久に嫁ぎ醍醐輝弘を生んだ。

鷹司 并子は蜂須賀斉昌の正室である穰 (じょう) 姫 (彦根藩 13 代藩主 井伊直中の娘) が文政 4 年 (1821 年) に亡くなった後、継室として斉昌に嫁ぐ。

その後、鷹司 政通は関白として 30 年もの長い間、朝廷で大きな権力を持つことになる。そして政通は水戸藩主徳川治紀の娘・鄰姫を娶り鷹司 標子が生まれる。その鷹司 標子は蜂須賀 斉裕の正室となり、蜂須賀 茂詔を生む。

この様にして須賀家では、鷹司家や醍醐家との婚姻関係を通じて公家への傾斜を強めるようになっていく。

その事が、最後の藩主である蜂須賀 茂詔が 2 代貴族院議長そして文部大臣を勤め、麿香間祇候の待遇を受け正二位勲一等侯爵の位階まで上り詰めることが出来た事と繋がるのかもしれない。



「花鳥図」載姫筆 徳島城博物館 大蜂須賀展リーフレットより

